

東京大学教養学部「紀要・比較文化研究」第二十七輯
抜刷 (一九八九年三月)

認識と相互理解

——「諸文明間の相互認識のための
国際機関」主宰の国際学会に出席して——

稲 賀 繁 美

認識と相互理解

—「諸文明間の相互認識のための国際機関」主宰の国際学会に出席して—

稲賀 繁美

パリ人間諸科学の家(Maison des sciences de l'homme)のアラン・ル・ピション(Alain Le Pichon)氏の招待で、一九八七年五月二十五日より三日間、ベルギーの大学都市ルーヴァン・ラ・ヌーヴでの国際学会に参加した。以下、その報告を申し上げ、ヨーロッパにおける「比較文化」の現状の一斑をご紹介できれば幸である。

おひざもとをはじめとして、ポロニーヤ大学、ベルリン自由大学、ホルドール大学等の協力の下に創設された「諸文明間の相互認識のための国際機関」『TRANSULTURA』の主宰になるこの学会は、ネグリチエード運動の主導者、セネガルのレオポール・サンゴール(L.S. Senghor)名誉会長のメッセージをもって開幕した。セネガルの格言とノヴァーリスの詩の共鳴から説き起こし、人々の口に出せない事実を、コーラというギターやタムタムをバックに、公衆の面前で白日の下に晒す権威を持つ、グリオの詩の力に言及するサンゴールは、かくのごとき他者性を詩に託して内に宿す社会がアフリ

カのみならず、同様に帝国主義的篡奪の被害者であったブルターニュのケルト文化にも見いだされる不思議を尊く思い出しながら、Le Villennaque の手で記録された、ドルイドと一人の子供の会話を引きつつ、他者の内に普遍をみる夢を語った。

つづいてモリス大使のレイモン・シャスル(R. Chastle)がセガレンのエクソティスム論を引用しつつ、ついに自らのものとはできぬ異文化体験を、究極的な喪失感として生きるという悟りに触れた。西欧対非西欧を占有対被占有という対立として把握するのでは、かえって、民族的な価値の絶対化という逆さまの帝国主義に至るおそれがあり、むしろ片務性から相互的交流への脱却が新たな道であるとしたが、文化同一性、さかしまの人類学、相互性による経験の豊穡化、さらには最適条件での発展と解放といった観念には、ルシアン・フェーヴルの楽観主義と、ジョルジュ・バランディエの図式とがちらついて、フランス的教養がかえって批判精神を鈍化

させているとの印象を否めなかった。

ここで学会は突然異界に遭遇する。黄地に水色の波文様刺繍で服と帽子とを統一したグリオの出現である。ギターの上に、ときに魂を吐き出すような強い声で各国の人々へと挨拶を送るディエパ・バテ氏(A. Diabaté)には、まさしくいすこにも属さずという境界人特有の、独立覇気と不可侵の権能がみなぎっていた。ふと気付いて見ればこの学会への参加者はまだ一人ひとりが周囲にとっての異人のままであった。

昼食まで散歩がてら大学都市を見学する。少し汗ばむほどの好天だ。中世の大学町を現代に再現した文字通りポスト・モダンな町並みには、入り込んだ路地、アーケードが複雑にはりめぐらされ、そのあちこちに壁画があり、ふいに見はらし台に出る。かと思うと、横道に入れば黒人の子供たちが歓声をあげている。まわりは広大な丘陵を森と草原とが蔽っており、そこかしこに山小屋のような住居棟が散在する。ほとんど夢の如き環境である。

*

午後の発表ではパリの神経生理学者ダンシャン(A. Danchin)の仮説が注目された。行列論を記憶メカニズム解明の鍵とし、局所論ではなく、むしろ汎在論として、例の金剛界マンダラを思い出させる散在系に記憶場を設定しようとする現今の傾向を説明したのにつづいて、同氏はニューロンの連鎖の樹状

個を定位する世界を生きているからではあるまいか。

コトバにとらわれたヒトには、動物の世界像を体験することはできない。だが異文化の理解という次元では、少なくとも国語がいかなる隠蔽と遮断の装置として介在しているかを知ることにはできる。バマコのソー氏(M. Sora)は、マリの口承伝承における白人の表象について、フランス社会学の方法に基いた調査を行なおうとして成功しなかった。語りとは体験を物語へと変換する営みであり、それは異言または権力の言葉に他ならない。声はどこから来るのか。アフリカの民が、自らの語りを西欧側の視点から追いかけてよとした時、語りは調査の手をぬけ落ち、消え去ってしまったのである。調査失敗の理由をこそ問わねばならぬ。

ついでニアメのニアン氏(M. Niang)が、ニジェルにおける日本像について語ったが、ここでもフランスのメディアによって造られた日本像が無批判のままコピーのコピーを作ってフランス語圏アフリカ諸国に伝播し、一種あわせ鏡の魔にとらわれているのが印象的であった。コピー文化の国の表象が、コピーの内に霧散することによってしかその正統性を主張できぬのなら、それはそれで慶賀すべきことも知れない。民族学博物館の小川了助教授は、伝統と近代の同居というフランス語圏特有の日本像は、歴史的知識の欠如に由来する短絡であるとの意見を示されたが、これに対するニアン氏の反論にもあったように、むしろ問題は歴史性の介入によって正誤を決することではなく、小生流に言えば、フランス式教育によ

枝分かれの部分にチョムスキーの言、Syntaxe nominale を、フィードバックの部分に Syntaxe verbale を指定した。これに対してアラン・レー(A. Ray)「小生などが反論を加えた。ホメオスタシスは動物にもある機構であり、それをダンシャン氏によれば動物にはない」とされる統辞能力の特性の説明に利用するのは、説得力を持ち得ない。また生成文法という思弁の産物を生物学的レベルで根拠づけようとするのは、そもそも議論が倒立しており、またその試みは今日すでに失敗に終わったと見做されている。

ダンシャン氏の思弁に倣って想像をたくましくするならば、むしろ Syntaxe verbale のネットワークの内に像をむすぶ「もの」を「名詞」へと実体化する点に人語が出現するのではないか。この時点でモンテニユも言うようにヒトは動物と語り合う術を失ったのであり、コトバとは出現の時から物象化の民にからみとられていたのである。

コトバとは世界をコトに分けることである。norme コトフリをうちたてることである。ランボオのアフリカ行の沈黙とは、ポローニヤのカプート(G. Caputo)博士も説くように、コトバの外に拡がる *«normité»* への恭順の証しではないか。精神分裂症や失語症の研究が Syntaxe nominale への欲望にこそ人語という病いの根源があることを暗示しているようだ。《Je est un autre》という認識こそが「自然」なのであり、動物が統辞言語を喋らないのは、彼らが名詞としての「我」の幻想が析出する以前のいわば述語論理に

る認識装置が、非ヨーロッパ社会の歴史性に対してほとんど必然的に盲目になってしまふ点にこそある。なぜなら非西欧社会の地域的特質即伝統という同定によって、その地域固有の伝統の近代化という可能性は、それ自体論理矛盾として否定されてしまふからである。また逆に、伝統をうんぬんする者にはいや応なく「反近代主義者」というレッテルが貼られてしまふ、という困った事態もこれと同根である。

ニジェルにおける、「良質日本製品」と「悪玉日本人」というイメージは、奇しくも日本における舶来品珍重(日本人の外国産「日本人論」歓迎も例外でない)と外国人苦手意識に呼応する。一般に、海を渡って来た商品は高級品と評価し、その代り本物の「異人」は徹底的に認識の周辺に遠ざけようとするのが、「伝統的共同体」に典型的な、「外」に対する反応のパターンだったのではないか。

このモデルの有効性を裏付けたのが、広東の長安村における外国像の二世紀にわたる変遷を追った詳細な研究である。ティロー女史(J. Tiroon)のこの報告は、農民たちの頭の中の小さな鏡に世界全体がいかに映じ、そして変貌していったかをたどって、あたかもル・ロワ・ラデュエリーの「ラ・モンタニユー」を彷彿とさせる長編叙事詩の観があった(是非日本語に訳出する機会を得たい)。平安村はその地理的条件ゆえに、早くから欧米との交渉がさかんで、十九世紀中葉からは合衆国に一時移民しては金を儲け、本土の家族を助け、やがて死期至れば村に戻って先祖の列に加わるといふ、一種神

話的世界を生きた集落である。村人たちは折からのゴールド・ラッシュと重なって、合衆国を「金山」と呼ぶに至る。

「金山」からの宝である商品は「洋」品と呼んで珍重されたが、反対に二十四孝に欠ける欧米人のふるまひは、彼らの道徳に照して非人であるとの認識から、その異人たちは人にあらざるもの、つまり「鬼」であるとの連想が容易に機能した。実際、「鬼」とは、生まれかわりの輪廻からはみ出してしまった、行き場なく迷える魂を示す言葉であって、さればこそ先祖信仰を否定するキリスト教宣教師たちは、自分たちを先祖から切り離された「鬼」の運命に追いやり、社会秩序の根幹を破壊しかねない「非人」と映じたわけである。

一九四九年の革命とともに、当時外地にあった村民は村に戻る可能性を失ない、アメリカに骨を埋めることとなった。先祖から切断された二世三世たちは、文字通り根なし草となつて、中国人としての同一性を文化的に喪失する。子供たちの染つてしまった「金山」の風習に親たちが「鬼」を見るのは、自分たちがもはや帰帰不能な異郷というおそるべき境涯を生きていればこそその不安を翻訳している。

社会の文化触変は、日本人の場合も、ブラジルやハワイの例に ついても、比較文化の領域でとりあげられるべき話題である。折から安部公房が、ビジンの語のサンクレティスムからクレオール的変成を経た根なし国語に、普遍文法の夢を託し始めた昨今である。この件をボルドー大学の認知心理学者ザヴィアロフ教授 (N. Zavaloff) に夕食の際、質してみた。半信半疑

の表情で同氏は Claude Hagège の *L'Homme de Paroles* を反証として掲げ、もつとも自分もこの著者の音声言語中心主義には批判的だ、と語ってくれた。ホテルの食堂の芝生の先にはすぐにも鬱蒼とした森が波うって連なり、その内からイノシシの一家が子連れで散歩に現われる。まことに浮世離れた大学町、食後の散策の爽快さたるや、およそ観光客だらけのハイデルベルクは哲学の道の比ではない。

*

二日目は、学会組織者であるル・ビション氏が、「詩の理、遊牧の理」と題して、西欧近代の知の偏向を死体解剖と決めつける、しかしあくまで博言学にとつた講演で開幕した。ノマド思考といった言葉は日本でも流行の様子だが、その語源を *nomos* に遡り、派生状況を問い直すだけの手続は最低必要ではないか。流浪の思考を、人は定着性の強い農耕的思想と対比するものだが、遊牧こそ、結果と教養上げ、配分と分かちあいの精神が、秩序への強い超越的な志向を伴って植えつけられている。ノマド的思想に、西欧の体系知の限界を越える、柔軟で開かれた知を夢想するのは、和辻哲郎の「風土」よりも曖昧かつ単純な思い込みでしかない。むしろ日本文化研究者としては、神道思想における神と我々との交わり方のうちに生ずる「ノモス」の形態を、我々の理、*logos* 世界の分節化様式(こと、まこと、ことわり、ことのは等々)

に即して問い直す必要を強く感じた。

「解剖とは復讐することでもある。」(フローベール)。「原典腑分け」に甘んじてはられない。その限界をいかに越えるか。この問いに答えるかのようにダカールのバルデ氏 (S. Balde) は、パリという町の内臓の内に入りこんで、右も左も失なう経験を、現象学的に記述してみせ、はなはだ印象的であった。体験は文体に直接反映され、ほとんど失語症に近い沈黙の末に鋭い観察が警句のように飛び出し、その意図せざる痛烈な皮肉が、パリ生活者の知らず知らず身に染め込んだ常識の奇怪さを暴き出す。パリでラマダンの戒律を守ろうとすれば、それだけで一篇の悲喜劇が書ける。

と、この異邦人の道行きは、しよせん点と線の攻略にすぎず、勝敗ははじめから歴然としている。考古学が死体愛好癖ならば考現学とは対象の内自らを失なうことだろうか。この倒立した人類学的調査は、それだけで西欧人類学のパロディとしての批判たりうるが、こうした企てそのものも、西欧近代の学問に対するドン・キホーテ的な抵抗となる他ない命運をも体現していて、彼のまきおこした数々の笑いは、我々を深い内省へと導いた。

その内なる声は、パリを仕事場とする作家ノヴァリナの声である (V. Novarina)。言葉が言葉自らを語るようにと、作家がおのれに課す、おのれを失うための熾烈なまでの調教訓練。時間の外に出るために自らをスケジュールでがんじがらめにし、その背水の陣の破れたところで紙面に落ち始める、

もはや主人をもたぬ言葉たち。それはあたかもパリの雑踏を行く群衆の一人として名を失った異邦人が、その自己喪失体験の内に見いだす、失なわれたものとしての言葉に相通するものではないか。ここにおいて意味とは、もはや伝達しようとする内容の謂ではなく、むしろ表現する術も知らぬままそれとさし示すことでもって覆い隠す他はない、言語龜裂下の何物かなのである。

詩人とは言葉を奪われる体験に他ならぬ。そのことはレバノン出身のキリスト教徒詩人サイエグ氏 (J. Saegheh) の体験談に具現されていた。神からの啓示であるアラビア語を通じての詩作は、キリスト教徒である氏にとつては啓示からの自己疎外であり、言葉が雄弁に自らを語れば語るほど、詩の主張する正統性は作者としての詩人を裏切つてゆく。詩人は自らの詩に対して異邦人として亡命する他ない落人である。

語るほどに言葉から隔てられるというこの悪夢のような感覚は、機せずしてベルリン自由大学のアフリカ民俗学者ミューラー博士 (F. V. Müller) がそのフィールドで体験したものであった。予定されていた、「ヨーロッパがいかに西アフリカの歴史を表象してきたかの歴史についての報告」をご破算にした同氏は、自分の専門とする西アフリカの歴史を記述しようとする試みになにか割り切れぬものがある、というその感覚そのものについて、それこそぼそぼそと奥歯にもののはさまったような語り口でしか語り得ぬはぎれの悪さを隠さなかった。

民俗学者が自分の仕事に抱く胡乱さの感覚のよってきたるところを示唆したが、つづくルーヴァン大学のレゾアジー教授 (R. Rezoahaz) の時間についての哲学的な一般考察である。時間厳守を強調する現代社会が、かえって時間の尊さを忘れる本末転倒をきたしていることは、今さら言うまでもないが、按ずるに、おそらく歴史記述という行為はすぐれてこの逆説に掉された狂気の一形態に他ならない。

私見によれば、既にサンゴールのテクスト、さらにはル・ビション氏、ノヴァリナの発言に明確に示されていた通り、物語り||歴史という行為は、歴史の当の主体ではない異人によって語り伝えられる他ないのであり、その異界性なり他者性こそ「歴史を生きる」という不可能な追体験の含蓄もある。またサイエグ氏を敷衍すれば、神の名の下に正義を司る検事がサタンの定義であるというユダヤの伝統を顧るにつけ、正義として歴史を語ろうとする意志こそ人を真理から遠ざけるのであって、シユラー博士の抱く漠然とした居心地の悪さこそ、むしろ健全な認識なのではないか。アフリカを非文字、非歴史の世界と言うのはもちろん正しくないが、アフリカが「歴史」を拒むのは確かであって、むしろ語られてある歴史とは全てアフリカについての幻想の表象体系でしかない。さしあたっての我々の急務はこうした「アフリカの幻想」なり、「幻想の東洋(彌永信美)の精神史を再構成するにあるのではないか、といった提言をこのセッションの終りに試みたが、これ自体「お話」になりにくい話題で、いささか禅問答にな

ってしまった。にもかかわらず、後で多くの参加者から、このコメントに感謝の言葉を頂戴できたのは有難かった。なりゆき上、昼食はアラン・レー、ノヴァリナほかの面々に東洋思想についてあることないことを開陳している間に午後のセッションに遅刻することとなる。

*

もっとも午後のトップ・バッターも一緒に食事をしているのだから心配はない。マドリッドのリゾン・トロサーナ教授 (Lison-Folosana) は一六二五年に中国を訪れた「アラゴン人」 Adriano de Las Cortes の旅行記について報告したが、これはつづく汪新生氏(孫中山大学)の、これが初めての外国旅行とは思えぬ見事なフランス語での発表(張徳彝の『航海述奇』一八七〇—七二年の記録で現在「走向世界双書」十二巻の内に入っている)と対をなした。互いに他を異境とみることもあたかもオールドコックと久米邦武の対比を思わせるが、しかもどちらも己れを世界の中心と自負してはばからぬ外交官の記録だけに、島国の民の記録とは一味違った筋金入の首の硬さが伺われる。例えば中国人は日本人と違って西欧の工業文明にたとんと関心を示さなかったし、三世紀半前のアラゴン人は、シナ人の目に映じた自らの姿を通じてはじめて自我を体験するという、内なる他者出現の経験を書きとめている。鏡中の自分の顔に嫌悪した、漱石が滞欧期の心

理主義的反応と、これはまた何と対蹠的なことか。

こうした「王者」の国同志の認識のずれが作りだす「さかしまの異境」のメカニズムは、かえってそうした絶対者の立場を享受できない、文化地理的周縁を形成する視点から、よりよく観察し得る。それはまずポロニーニヤという、光溢るるイタリヤを体現するにはあまりに陰鬱で、しかもアルプス以北の国に対してはあまりに南国である一都市のどっちつかずという自己同一性の不確かなる運命を、フランス、ドイツの旅行者たちの眼を通じて再現してみせたリッチ (G. Ricci) 教授の発表であり、さらには、ブラジルとフランスの両文化のほごまに身を置き、フランス人以上にフランス的教養を身につけてしまったゆえに空虚なるアイデンティティの追求に悩むブラジル人の心性を切々と説き、ほとんど痛ましいまでに傷つきやすい魂のやさしさをみせつけて、この日の白眉となったカレリ氏 (M. Carrelli) の談話であった (彼の近著 *France-Brazil-Bilan pour une relance*, éditions Entente, 1986 (共著) は、日系ブラジル移民の件も含め、比較文化の学徒として一読すべきものかと思ふ)。

こうした魂のたゆむたいは、アゾレス諸島からの来客、リュイ・デ・スーサ氏 (Lui de Sousa) によっても詳述された。アメリカでもアフリカでもかつての海洋王国ポルトガルでもなく、しかもそのどれでもあるこの諸島は、それを構成する島々の商工政それぞれに不均衡かつ相対的な分布も手伝って、中央集権にも地方分権にもなり得ぬ流動的な共存文化を緯糸

に、そして外的勢力の戦略的関心に左右されて揺れ動く帰属意識と、統一され得ぬ民族意識とを糸系とする、複雑な社会史を織り上げてきた。この複合文化に育まれた自己を語るには、ひつきょう自己の内、引き裂かれながら合唱しようとする複数の声に耳傾ける行為に他ならない。

異文化体験、境界人と来れば残るは交流である。ド・ベチニーム神父 (P. de Bethune) がこの役を買って出た。同神父はここ三年来ベネディクト派と日本の禅寺との交流を、現教皇ヨハネス・パウロ二世のたぐいまれな熱意の下で手まぐりしている仕掛人である。しよせん教義上での対話は成立し得ず、みじめな失敗を験し、その困難には神父自身の予想を絶するものがあつた。だがロゴスではなくエティックとしての交流という途に彼はひとつの啓示を見いだした。hospitality という語の両価性は人も知るところ。歓待と交歓とは相手が敵であり、互いに相い容れぬという前提を、しかしそのまま受け入れて尊重するところにのみ成立する。この体験はもとよりロゴスによって書きとめられることを拒絶するがゆえに、学会という枠組の中で communication (報告) するべくもない。それにもかかわらず、神の下で食をわかちあう (コムニパニオン) という神道にも通底するホスピタリティの精神が、教義にこり固ったかたくなな心に意外な風穴を穿つ。「寛容さは非寛容の前で寛容たり得るか」とは小生が自分の報告の最後にとりあげた昔からのアポリアであるが、それへの実践的な返答を同神父から示された思いであ

った(註一)。

同夜は同神父、そしてリゾン・トロサーナ夫妻と食事。米国生れの同夫人は若干フランス語に不自由なので、英語を公用語に御三人と日本の思い出を語りあううちに、いつまでも暮れぬヨーロッパの空もいつしか深い群青に変じていた。

*

最終日。まず小川了助教授が国立民族学博物館の紹介を通して、いかに日本人がアフリカ文化のみならず外の文化一般を見てきたかという、いわば前日の対照例を検討した。ヨーロッパの民俗博物館に対して五十年の遅れのお蔭で、植民地主義的興味とは独立した地平に、宝物殿ではない科学的資料提供センターを築き得た点を強調し、手で触れても良い展示にもかかわらず開館十年で盗品皆無といった逸話をはさむ、いささかの自画自賛であった。小生としてはむしろ、異界よりの招来品をひたすら保存するばかりで、展覧も逆輸出も決してしなかった日本の伝統的な美術行政ひいては文化姿勢に対する象徴的反証としての「民博」に、かえって、文明のはきだめとしての日本の政治地理的特性を確認した次第だった。

つづくはミラーノのアフリカ研究センター長バッサニ博士(E. Bassani)のいかにも美術史家臭い、資料発掘に淫した発表(これは同氏の企画した展覧会 *Nobin o Sehaggi?* *L'immagine dell'Africa Nera e degli Africani nelle*

に求めた東方幻想の一端をなすものであり、バッサニ氏の発掘した貴重な資料を、たんに誤解の産物と不用意に矮小化する代りに、その図像にかかったバイアスの方向を文献学的に詳かにする必要があるので感想を述べた。

つづいて稲賀は前衛藝術に対象を限って、非西欧世界に内在的な前衛藝術というものを表象することが、西欧の認識装置には不可能であり、その盲点がとりわけ第三世界の文化政策にいびつな自己疎外を生んでいることを、日本を例にとつていささか思弁的に展開した。これを司会のサイエグ氏は「他者性を前にした我の弁証法の根本的な問題提起」と評価し、制限時間を無視して、議論を開いて下さった。

これに心えてまずアフリカからの参加者たちが、西欧に対して自らの文化を語る際に漠然と抱いてきた自己に対する不信感と失望とはじめて体系的説明を与えたものと評価しつつも、自己の文化を代表することが知的裏切りであるとする稲賀の論点は承服しかねるとの保留がなされた。思うに文化を他者に表象する行為が象徴的外傷と意識されるか否かは、その媒体であるフランス語がどの程度内在化されているかの度合によるのであろう。日本人のように非フランス語圏の者はそれだけ外傷を転移し外在化するのが容易なのに対し、逆にフランス語のみを公用語とするアフリカの民にとって、この外傷は容易に心理的ないし情緒的レベルへと抑圧され易い。続く議論を通じて、藝術作品と骨董的美術品との区別が前衛神話と表裏一体の恣意的な分別装置であり、それゆえ非西

illustrazioni europee dal Cinquecento al Settecento, Centro studi Archeologia Africana, Milano) にくく)。ヨーロッパでは一次史料がヨーロッパ的偏見にゆがめられて出版されるのに対して、ベニンの彫刻におけるスペイン人の形象は忠実であって、前者はラシスト後者は写実的といささか、かつてのヨーロッパ人を断罪することでおのが罪滅しをするが如きその発想に、まず司会のサイエグ氏が噛みついた。

曰く、西欧人を非西欧のお白砂にひき出して、帝国主義の自己批判を迫っても贖罪にはならぬ。むしろ今日では第三世界こそ自己の内に専制体制を作り自らを植民地化しているという現実を直視するとき、罪を西欧にかぶせるよりも、こうした代替的支配メカニズムを自らの内に宿した第三世界に、西欧非西欧を問わず我々は反省を向けねばならない。またニアン氏は、人種主義とか客観的といった評価はあくまで我々の主観的判断にすぎず、そうしたレッテル貼りの行為そのものの問題性を問わねば、安易な責任転嫁となるおそれがあるとした。さらにファイクハスジュズ夫人(Faucher-Juz)は文字資料、口承資料を検討すれば、アフリカ側にも白人に対する誤解・偏見はいくらも見られるものであり、一方的に黒人アフリカを善人に仕立てたのでは、文化交流が避けて通れぬ困難にかえて目をつぶることになり兼ねぬと指摘した。最後に稲賀は、アフリカ人を古代ローマ人に模した例について、これはむしろヨーロッパが、失われたローマ文明の遺香をアフリカ

欧社会——中国を含む——で自国文化の振興を目指す与否はなく伝統主義の「復興」に帰着し、少なくとも「国策」としては前衛との接点を失う、というジレンマが確認された。さらに小生は、伝統主義という視点そのものが、西欧的視座に依拠した政策決定者の、自国文化に対する外化された眼差しと距離感の表明に他ならぬことを強調した。

はからずも小生につづくルーヴァンのネイト教授(F. Neyt)のアフリカ美術の聖性に関する入門講座のごとき上品な発表は、こうした外化された眼差しが体系化されるにつれてかえって隠蔽する問題性をありありと示していた。聖物、伝統といった用語の無批判な使用は、それらの用語の定義の網の目に従って、対象たる現実を別様に織り上げてしまつ。学問的議論は西欧語の哲学的カテゴリーに沿って展開されるから、以降原人側からの反論はほとんど有効性をもち得ない。そもそもアフリカ的美術品という規定じたいが問題となる。祭の仮面などは「美術」といった機能的分類になじまないからこそ、「聖性」との媒介物になりえたのに、そうしたメカニズムは西欧的文脈に移されたときに消滅してしまうのである。だが学問が機能論の上にその根拠を据える以上、このジレンマは止揚されることを拒みつけ、文脈移し換えの試みは、自らの負う象徴的な傷によってしか、その誠実さを証しすることができないだろう。だがこの傷のみが、学的な他者理解の企てを支える、唯一の存在理由なのである。

ここにおいて、会議冒頭のサンゴールのテクストの意義が明らかになる。自らの歴史を語るのは他者であり、語り部はまれ人であり、共同体の外なる存在なのである。そして知識人の役立たずゆえの存在価値とは、この絶対的な他者の役割りを演ずる倒錯を描いて他にない。人類学者がその原代人インフォーマントにおとらず、出身文化圏にも対象文化圏にも内属し得ぬ境界人であるのも、いわば他者性の刻印を自らスティグマとして負った宿命であり、彼の刻む言葉とは、文化と文化との間の摩擦が造り出す傷跡なのだろう。なればこそ彼は現代の語り部であり、文化英雄でもある。「太初に言葉ありき」。彼の内に言葉は宿る。だが言葉こそ人類がヒトとして聖別される代償として蒙った、癒し難い原初の傷ではなかったか。

いさゝか身勝手を申せば、比較文学・比較文化、相関科学とはその傷をこととする学問である。個々の領域を持つよりは、それはむしろ領域間として諸学問の交差点としての開かれた態度の謂である。事実 TRANSCULTURA の照らし出した問題をさらに深めるためには、哲学、倫理学、宗教学、人類学、言語学、精神分析、詩学といった諸学の協働が不可欠である。おのが専門領域を実体化する幻想と権威欲にとりつかれた学問は、こちたき理論構築へと内没する。比較する学問、相関をめざす学問とは、これら専門領域に対してメタな学問姿勢でまればこそ一層謙虚になければならない。守るべき領

土なき学問だからである。野を平定して、傷の癒しのうちに真理の王国を成そうというのではない。むしろ結果の上に踏みとどまり、真理に身を晒し傷刻まれる憑代に殉じようというのである。だがそうした他者性にはたして人は永く耐えられるものだろうか。

最後の夕食の席には、本日ようやく到着した北京の単光輝中国社会科学院社会学研究所所長も交え、談論風発。予定される欧州四大学への非西欧研究員招聘の成功と、来年ボローニャでの再会を祈って参加者は旅路に着た(註2)。

(一九八七年六月一日)

註1 Benoit Billot, *Voyage dans les monastères Zen*.

Desclée de Brouwer, Paris, 1987; 4-4 Michiko Ishigami Iagohitzer, "Dialogue entre bouddhistes Zen et chrétiens" (à paraître dans: *Aide Inter-monastère*, 1988) を参照。

註2

その後、本会議議事録が *Connaissance et réciprocité, Transcultura*, Actes du Colloque organisé par l'Institut international pour une Connaissance réciproque entre des Civilisations, Presses Universitaires de Louvain (U.C.L.), Giacomo éditeur, 1988. 上記 Umberto Eco の序文を付して出版され、教養学科図書館に1冊寄贈された。なお *Transcultura* の巻終光緒 I Allée de Clerlande, B-1340 Ottignies, Belgique P.496。